

## 京都市における幼保小の架け橋プログラムの方針 Q&A 更新



**Q1** 「幼保小の架け橋プログラム」とは何ですか？  
なぜ、必要なのですか？

**A1** 「幼保小の架け橋プログラム」とは、幼児教育と小学校教育を円滑につなぐために、架け橋期の教育を充実させる取組です。文部科学省が令和4年度から3年間、モデル地域を中心に進めてきたもので、京都市もそのモデル地域の一つとして参画してきました。令和7年度からは、全市で一斉に取組を進めています。

このプログラムでは、子どもに関わる大人が立場を越えて連携し、架け橋期にふさわしい主体的・対話的で深い学びを実現することを目指しています。その上で、一人一人の多様性に配慮しながら、全ての子どもが学びや生活の基盤を身に付けられるよう支援していくことを目的としています。



**Q2** どの地域でも、これまでも幼保小連携に力を入れてきたと思いますが、架け橋プログラムは何が違うのでしょうか？

**A2** これまでの幼保小連携では、主に5歳児の10月頃から1年生の夏休み前までを「接続期」と位置づけ、年長と1年生の担任、そして管理職を中心に、「子どもの情報共有」と「行事連携」「交流」を目的に任意性の高い取組を進めてきました。しかし、幼児教育と小学校教育では、カリキュラムの考え方や指導方法に大きな違いがあるため、教育内容に踏み込んだ連携や、学びの連続性を見通した接続までは十分に行えていませんでした。

こうした課題を踏まえ、5歳児から小学校1年生までの2年間を「架け橋期」と捉え、子どもの発達・成長を中心に据えながら、教育の連続性と一貫性を確保するための取組が「架け橋プログラム」です。このプログラムでは、子どもに関わるすべての関係者が立場を越えて協働し、学びの基盤を育むことを重視する点が、従来の連携との大きな違いです。





**Q3** 架け橋プログラムは、5歳児と1年生だけの取組ではなく、小学校では1年生から6年生まですべての教員が取り組んでいくことが大切だと言われていますが、それはどうしてですか？

**A3** 架け橋プログラムは、幼児期の「環境を通した教育」を生かし、1年生における主体的・対話的で深い学びの実現を図るものであり、1年生だけでなく、6年生までのそれぞれの学年での授業改善につながっています。幼児期の学びを引き継ぐためには、1年生だけが変わっても、2年生以降の学びにつながらなければ効果が十分に発揮されません。

また、架け橋期で育てたい主体性・対話・自己調整力などの「学びの基盤」は、6年間を通して継続的に育成していく必要があります。

そのため、全学年が幼児期の学びの特徴を共通理解し、学校全体として一貫性のあるカリキュラム・授業づくりを進めることが、架け橋プログラムの本質となっています。



**Q4** 架け橋プログラムを進めるにあたって、就学前施設での保育を参観し、「幼児教育に学ぶ」と言われますが、どんなことを学べばよいのでしょうか？

**A4** 初めて就学前施設の保育を参観すると、子どもたちが「ただ遊んでいるだけ」に見えるかもしれませんが、しかし、一人一人の姿を丁寧に観察すると、心が動く瞬間や、遊びが次々に発展していく様子に気づくことがあります。こうした遊びの中に見られる学びの姿を、「幼児期の終わりまでに育てほしい姿（10の姿）」と照らし合わせたり、その学びが小学校での学びにつながる点を考えたりすることが大切です。

また、子どもたちの学びの姿は、環境構成によって引き出されていたり、保育者の意図を持った声かけや関わりによって生まれていたりします。小学校で「主体的・対話的で深い学び」を実現する上で求められる「環境を通した教育」は、まさに幼児教育から学ぶべき重要な視点の一つです。





**Q5** 就学前施設の保育者が、小学校の授業を参観した際、どんなことを学ばばよいのでしょうか？

**A5** 小学校の授業と聞くと、多くの方が「一斉授業で、教師の発問に対して子どもが挙手して答える」というイメージを持たれるかもしれませんが、実際にそのような授業もありますが、現在はそれだけではなく、子どもたちがグループで話し合ったり、一人一台端末を活用して学びを深めたりする授業形態が広く取り入れられています。主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、多様な授業づくりが進んでいるのが特徴です。また、子ども自身が理解度や興味に応じて学習の順序や方法を選択し、学びを進める「自由進度学習」に取り組む学校もあり、小学校の授業のあり方は大きく変化してきています。



このような変化の中で、小学校が育てようとしている資質・能力は何かという視点をもって授業を見ることが重要です。さらに、自園で育てたい資質・能力とどのようにつながるのか、また自園の保育と小学校教育の間にある連続性をどのように見いだせるかを考えていくことが大切です。



**Q6** 小学校区にある就学前施設と連携を図っていくということですが、本校では、毎年小学校区以外からも30園近く入学してきます。その園との連携はどのようにしていったらいいのでしょうか？

**A6** 就学してくる子どもの情報共有については、これまで通り、小学校区以外の就学前施設とも確実に行ってください。また、年度当初の公開授業や新入学児の親子を招くオープンスクール等については、すべての就学前施設に案内を送るなど、配慮や工夫を行うことも可能です。



しかし、すべての就学前施設と小学校が継続的な連携を行うことは、物理的にも実務的にも困難です。架け橋ミーティングや子ども同士の交流、合同研修などの取組については、原則、小学校区内の就学前施設と実施し、「目指す子ども像」の共有を通して、架け橋期の教育の充実を図りながら、互いに学び合いを深めていくことが重要です。



**Q7** 架け橋プログラムの取組を進めると、交流する回数がどんどん増えていき、担任の負担が大きく大変です。どうすればいいでしょうか？

**A7** 交流を行うことだけが、架け橋プログラムの目的ではありません。各校・園、そして地域の実態に応じて、無理のない交流や取組を行い、持続可能な形で進めていくことが重要です。

次年度のスタートカリキュラムについては、1年担任だけに任せるのではなく、幼保小連携・接続主任を中心に他学年の教員も関わり、時間的な余裕をもって計画を立てるなど、組織的な工夫を検討するとよいでしょう。

また、5歳児や1年生だけでなく、各学年で主体的・対話的で深い学びの実現を目指し、授業や保育の質を継続的に改善していくことこそが、架け橋プログラムにおける重要なねらいです。自校・自園の校（園）内研究と関連づけながら取り組むことで、より一貫性のある実践につながりま



**Q8** 架け橋プログラムを組織的に進めるためには、どのようにすればいいですか？

**A8** 架け橋プログラムは、決して「5歳児担任や1年生担任だけの仕事」ではなく、学校全体の教育文化をつくる取組です。学びの連続性の確保、子どもの多様性への対応、そして地域との協働を実現するためには、校内・園内の全教職員が関わることが不可欠です。

このプログラムは、単なる「入学準備」ではなく、学校全体の教育方針に深く関わる取組です。全教職員が共通理解をもち、学校文化として定着させることによって、形式的な連携ではなく、組織的・持続的な実践へとつながります。そのためにも、各教員が「主体的・対話的で深い学び」を意識して授業改善を進め、幼児期からの学びの連続性を踏まえた教育活動を行うことが重要です。まずは、校内・園内の全教職員が架け橋プログラムの意義を理解できるよう、積極的に研修の場を設けましょう。

なお、京都市では、幼稚園籍・小学校籍の「幼保小架け橋コーディネーター」が、架け橋プログラム推進に関する様々な相談に応じています。また、「架け橋ミーティング」や「合同研修会」の講師としても対応していますので、悩みや課題があればいつでもご相談ください。

